

氏名	わた なべ おのれ 渡 邊 己
学位(専攻分野)	博士 (文学)
学位記番号	文博第149号
学位授与の日付	平成12年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科言語学専攻
学位論文題目	A Morphological Description of Sliammon, Mainland Comox Salish (スライアモン語(本土コモックス・セイリッシュ語)の形態法記述)

論文調査委員 (主査) 教授 宮岡伯人 教授 庄垣内正弘 教授 吉田和彦

### 論文内容の要旨

本論文はスライアモン語(本土コモックス・セイリッシュ語)の形態法を、筆者自身による現地調査でえた資料をもとに記述したものである。スライアモン語は北アメリカ北西海岸の先住民によって話されている。系統的には、北アメリカにある58語族の北米インディアン諸語のうち、セイリッシュ語族に属するコモックス語のふたつの方言のうちの一つである。スライアモン語にかんする先行研究は少なく、なかでも形態法にかんする信頼できる記述はほとんどない。本論文はスライアモン語研究のための基礎となるように、その形態法の、出来る限り網羅的な記述を目指したものである。同言語の話者は高齢者にかぎられ、その数も数百人のみと報告されている。すなわち、同言語はいわゆる消滅の危機に瀕した言語である。(ちなみにコモックス語のもうひとつの方言、バンクーバー島方言はすでに話者がおらず、死語である。)本論文の記述はこの言語の記録を後世に残す意味もあり、そのために個々の文法現象についてなるべく多くの例をあげ、さらに、まだ必ずしも完全にはその意味機能が解明できていない文法現象のデータをも含めるようにしている。

本論文は3部全16章と最初の「序」から構成されている。まず、「序」ではスライアモン語の系統関係、言語名の問題、先行研究など、予備的情報を与えている。

第1部(第1章—第5章)は音韻論を扱っている。音韻論の記述・研究は本論文の主課題ではなく、ここでの分析は基本的に筆者のこれまでの研究を踏襲している。ここでは、形態法を記述するうえで必要な音韻論の情報を与えるとともに、先行研究では報告されていない現象について記述している。なかでも第4章「超分節素(Suprasegmentals)」は、これまでスライアモン語では弁別的ではないと記述されてきた強勢について、弁別的機能があることを示している。

第2部(第6章—第15章)は形態法を扱っており、これが本論文の中心である。ここでは各章において扱う形態法を例示する際に、第3部の原語テキストからの例を可能な限り使うようにしてある。これは、ある形態素が、より自然な発話において使われている例を提示するためである。

まず第6章は、7章以降への導入として、「語」の構造、「語根」、主語代名詞、所有代名詞、自立代名詞、品詞、統語論にかんして情報を与えている。スライアモン語は述部内にボイス、アスペクト、複数性、目的語(他動詞の場合)、主語(倚辞で標示される場合もある)などを標示する複統合的言語である。そして、このような述部に対し、名詞項は無標のままであり、いわゆる頭部標示型の言語である。ここで特に品詞の問題を扱ったのは、セイリッシュ語族の言語には、名詞と動詞の区別がないと、しばしば主張されてきたためである。本論文ではスライアモン語における名詞・動詞の区別が何故つけにくい理由をあげ、しかし、その区別をつけうる基準を提案している。

第7章は「ボイス」についての記述である。ここでは「自動詞」、「他動詞」、「拡張他動詞(Extended transitives)」、「自動詞化」、「受動使役」の順に扱っている。

スライアモン語の述部がとりうるの是一项か二項である。前者は自動詞であり、後者は他動詞である。意味的に三項以上かかわる叙述でも、述部はそのうちの二項のみを中心格としてとり、残る項は斜格として扱われる。

自動詞には、語根に何も付かずにそのまま述部となりうるものの他、三種の接尾辞によって形成されるものがある。このうちのふたつはそれぞれ、「能動自動詞 (Active-intransitive)」「中動態 (Middle)」と呼ぶものである。前者の能動自動詞は動作主のみを項としてとる自動詞を形成し、このとき論理的被動者は斜格として扱われる。この点でこれはいわゆる逆受動態 (antipassive) と同じ機能を持つ。後者の中動態は、動作の結果が何らかの形で動作主自身に及ぶ述部に多く見られる。自動詞語幹の形成にかかわる三つ目の接尾辞は、限られた語根にのみ付加されるものであり、特定の機能があるというより、語彙化したものだと考えられる。

他動詞は四つの他動詞化接尾辞のいずれかによって派生される。この中には、セイリッシュ語学で「制御 (Control)」と「非制御 (Noncontrol)」と呼ばれてきたふたつの他動詞化接尾辞がある。このふたつは意味機能的に対立し、従来、その対立は動作主がある行為についてどれほどの制御性を持っていたかという点でとらえられてきた。本論文では、これを被動者に及ぼされる影響から捉え直すことが可能であることを指摘し、さらにその方がこの対立をよりの確に捉えられることを、それぞれの接尾辞によって作られた他動詞と、アスペクトの関係を探ることによって示している。

さらに、これらの他動詞化接尾辞が、必ずしも従来セイリッシュ語学で言われてきたように完全に排他的なものではなく、少なくともスライアモン語ではふたつの他動詞化接尾辞の組み合わせが見られることを指摘している。三つ目の他動詞化接尾辞は「使役」であり、四つ目は限られた語根にのみ付くものである。この四つ目のものは「制御」他動詞化接尾辞と同等の機能をもつと考えられる。

「拡張他動詞」にかかわる接尾辞は三つあり、それぞれは語幹形成の中で、必ず他動詞化接尾辞に後続される。これらは時に「適用格 (Applicative)」と呼ばれる機能をもつものである。このうちのひとつの接尾辞は、論理的被動者を斜格に降格させ、代わりに異なる項を目的語としてとる語幹を作る。

この接尾辞が先にあげた能動自動詞接尾辞と同形であること、さらに双方に被動者を斜格に降格させる機能が共通して見られることから、これらふたつの接尾辞がひとつにまとめるべきものか、検証が必要となる。本論文では、形式的側面 (異形態)、被動者の降格、双方が使われた語幹の動作主的性質、そしてセイリッシュ語族内の比較言語学的根拠の四つの点についてそれぞれ検証し、その結果、これらふたつの接尾辞を同一のものとするには根拠が不十分であるとしている。

「自動詞化」は「再帰」「相互」「受動」の三つに分けられる。それぞれの機能を担う接尾辞が他動詞語幹に付くことによって新たな語幹が形成され、その語幹は一項のみをとりうる自動詞となる。「受動」はその被動者が、他動詞の目的語を表わす接尾辞で動詞語幹に標示される。一般的に典型的な受動態では被動者が主語として標示される。そこでスライアモン語の受動接尾辞をともなった形式が、受動態と呼べるものか問題となる。本論文では、この形式が能動態と構造的に交替すること、動作主が斜格に降格される事、そして対応する他動詞に比べ、項の数が減少していることを検証し、これを受動態と呼ぶに十分な条件が揃っていることを述べている。

「受動使役」は、受動態の語幹に他動詞化接尾辞のひとつである使役接尾辞を付け、受動接尾辞によって他動詞から自動詞化された語幹を、さらにもう一度他動詞化する語幹形成を扱っている。

第8章はセイリッシュ語族の言語に特徴的に見られる「語彙的接尾辞 (Lexical suffixes)」についての記述である。ここで語彙的接尾辞と呼ばれる接辞は、純然たる接尾辞でありながら、具体的 (主に名詞的) 意味を持つものを指す。スライアモン語には80数個の語彙的接尾辞が確認されている。その半数近くは身体部位 (耳、目、手など) を表わすが、残りは特に意味的な特徴でひとつにまとめられるものではない (木、風、火、カヌー、におい、家など)。このふたつのグループは異なる振るまいを見せる。さらに、語彙的接尾辞には類別的機能があることと、特に身体部位を表わすもののほとんどが、第10章で扱う状態相で現われる場合、形態的に若干異なる形で現われることを扱っている。

第9章は重複法についての記述である。重複法はその形式から11種に分類できる。それらの機能はひとつの範疇に属するものではなく、複数、指小性、未完了相、起動相など多岐に渡る。このうち三つの重複法にかんしては、それぞれ意味機能にある程度の傾向は見られるものの、その同定は困難であり、ここでは形式の面からのみまとめてある。

第10章はアスペクトにかんする記述である。スライアモン語においてアスペクトは、時制よりも義務的に表示される範疇である。本論文では先行研究のうちのひとつがおこなった、アスペクトのテストをおこなうことによって、英語訳にのみ頼ることを避けている。このテストとは、時間の表現にかかわる副詞的な語 (「まだ」「突然」など) との共起の可能性を検証するものである。これにより、形態的に表示される未完了相、状態相、起動相を記述している。特に状態相は自動詞・他動

詞の標識と形態的融合などをおこすため、共起する形をひとつずつ記述・検証している。

第11章は複数を表わす母音変換にかんする記述である。語根の母音がシュワ (schwa) のものに限り、語幹によって、それを a もしくは i に替えることにより、複数性を表わすことができる。

第12章は「抽象的接辞 (Abstract affixes)」と呼ぶ接辞を扱っている。ここには複数を表わす三つの接辞、願望、過去を表わす接辞など、計11の接辞について記述している。

第13章は数詞にかんする記述である。ここではまず基数の形式をあげたあと、特定のもの (ひと、指、カヌーなど) を数える時に使われる8種の形を記述している。特定のものを数える形は、先にあげた語彙的接尾辞を数詞に付加することによって作られる。

第14章は倚辞を扱っている。ここでは倚辞の中でも述部に付くもののうち主語を表わすもの以外の21個を扱っている。倚辞には、疑問、感嘆、命令、伝聞、未来などを表わすものが含まれるが、意味機能の同定が極めて困難なものも少なくない。

第15章はその他に特に取り上げた現象として、補充法、借用語 (英語) の使用、そして感嘆詞について扱っている。ここで特に借用語 (英語) の使用にかんして扱っているのは、英語の語にスライアモン語の接尾辞が付けられていることがあり、そこにこの言語の形態法の生産性が伺われるからである。

第3部 (第16章) は筆者が採録したふたつの原語テキストを提示している。これらふたつのテキストはスライアモンに口承で伝えられてきた話である。テキストにおけるスライアモン語は音声表記、音素表記の両方で示した。そしてそれに分析をほどこし、各形態素にグロスをふり、さらに行ごとに英語訳が与えられている。テキストを含めることは、より自然な形で発話されたスライアモン語を提示することになる。さらに第2部で扱った形態的手段が、そのような実際の発話の中で、どのように現われるか見ることができる。テキストには注をふるることによって、第2部の該当セクションを示し、相互参照できるようにしてある。

## 論文審査の結果の要旨

本論文が対象とするスライアモン語は、話者が数百名の高齢者に限られる、消滅の危機に瀕した言語である。同言語を含むセイリッシュ語族の言語は、いずれもその音声的ならびに文法的複雑さと難解さによって知られ、研究者の周到な記述の試みを阻んできた。先行研究は音韻論あるいは形態論のごく一部を扱った数点に限られている。唯一存在する、ある程度網羅的な文法記述は、音声観察そのものに問題が多いため、文法記述自体の信頼性に欠ける。

セイリッシュ語のような統合度の高い言語では、形態法が統語法よりはるかに複雑に流れ、そこに E. サピアの「でたらめさ randomness」(泉井久之助訳) を示しやすい。文法記述はおのずと形態法がその中心となる。

本論文は同言語の、言語学的通念からはずれた異相の特徴をいくつか含む形態法を中心に、出来る限り包括的な文法記述を行おうとするものである。ここに記述されている音韻・文法現象の多くは、スライアモン語に関して初めて掘り起こされたものである。十数回のフィールド調査にもとづき、拮据完成にいたった本論文は、スライアモン語のみならず、その属するセイリッシュ語研究全体にとっての重要な基礎となる貢献だと考えられる。

形態法を主たる対象とする本論文では、音韻論はその予備的導入でしかない。しかし形態法の細部の闡明は正確な音声把握を前提とする。論者は、母音音素の部分的な重複さえ示す異音関係、曖昧母音の挿入、声門化・脱声門化現象などに覆われて、理解の妨げられていた強勢 (超分節素) が、同言語において周辺のながらも弁別的であることを初めて明らかにした。緻密にして丹念な聞き取り調査の成果である。この音声特徴の記載は、セイリッシュ語比較研究に資するところ大である。

形態法では、セイリッシュ語族の言語一般に見られる「制御 Control」と呼ばれる特徴的な現象がある。従来、セイリッシュ語学では、「制御他動詞」と「非制御他動詞」の対立を、動作者がその行為に関してどれほど制御性を持っているかという点で捉え、とくに疑問を抱かれることもなかった。しかし論者はスライアモン語におけるこの現象を、動作者側からではなく、逆に被動者側から捉えるべきことを提唱し、それによって、より説得力のたかい記述を可能にしている。従来のこの現象の扱いが意味に頼ったものであったのに対し、対立的な二つの他動詞のアスペクト的性質を探ることによって実証的に論を進めた論者の分析は、スライアモン語のみならず、同語族全体におけるこの現象についての再考を迫るものである。

スライアモン語におけるアスペクトの重要性に着目した論者は、さらに他の現象についても、さまざまな述部におけるア

スペクト的性質を確かめようとしている。方法自体は論者の独創ではないが、先行研究がこれを形態法の一部にのみ当てはめてきたのに対し、本論文では巨細漏らさず適用することによって、同言語の内的理法に近づくことに成功している。

本論文のなかでもっとも精彩を放っているのは、他動詞化接尾辞の記述である。従来、スライアモン語に存在する四つの他動詞化接尾辞は排他的なものだと考えられてきたが、本論文は必ずしもそうではないことを初めて指摘している。セイリッシュ語族の他の言語でも、これまで他動詞化接尾辞の組み合わせとそのもつ玄妙なはたらきは報告されていない。本論文のスライアモン語に関するこの現象の闡明は、同語族における広い存在の可能性を探る契機となるであろう。

本論文の性質を考えるならば、論者がみずから採録した原語テキスト（二編）とその形態分析を含めていることは重要な意味をもつ。扱うべき文法現象の生じるコンテキストが明らかにされることによって、その議論により信頼性がもたらされ、恣意性が排除されるからである。

もとより本論文にまだ尽くさざる点はけっして少なくない。スライアモン語の形態法にかんして、可能な限り包括的な扱いを意図したために、部分的には調査と分析が不足であったり、扱いがやや手薄となった面があるのは否めない。また、形態法における細部の記述は、今後より有機的に関連づけて考えていくことが必要であろうし、また語族内部における微細かつ深い掘り下げにくわえて、類型地理的に広く展望することがおそらく必要になってくるであろう。しかしこれらの問題は本論文の価値を著しく損なうものとは言い難く、スライアモン語の形態法の基本的な記述を試みんとした本論文の目的は十分に達せられていると言えよう。今後のスライアモン語研究は本論文を一つの重要な土台として発展していくとさえ言ってよいかもしれない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年3月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問を行った結果、合格と認めた。